様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年８月３０日現在

機関番号：６２６０８
研究種目：基盤研究(A)
研究期間：2009～2012
課題番号：２１２４２００６

研究課題名（和文）日本文学における言説編成機能に関する日仏共同研究

研究課題名（英文）Japan-France joint research on discourse fromation of Japanese literature

研究代表者
谷川　恵一（TANIKAWA KEIICHI）
国文学研究資料館・研究部・教授
研究者番号：10171836

研究成果の概要（和文）：日本文学の基本的な言説編成の特質が、明確な世界観やテーマに裏付けられた確乎とした編成原理の下にその構成要素を配置するのではなく、各々の断片をその独立性を保持したままゆるやかに包摂することにあり、異質なものを排除せずに内部に抱え込んでいく日本文学の独自の性格と断片を断片の姿のままで愛でるという独特な受容形態がそこから生じてきたことを、中古から現代までの具体的な作品に即し、通時的に明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to make clear the fundamental character of Japanese literature's discourse formation. Through examination of definite Japanese literature from the Heian period to the contemporary period, I was able to suggest that the fundamental character of Japanese literature's discourse formation was its tendency to subsume. It never arranges components under firm principles which are well supported clear views of the world and theme. It liberally adopts each fragment while letting them keep their individuality. It may safely be said that Japanese literature has a unique receptivity which appreciates each fragment as they are. It receives elements of different in kind without excluding them. I feel that this finding has greatly contributed to the field of study.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	7,600,000	2,280,000	9,880,000
２０１０年度	6,200,000	1,860,000	8,060,000
２０１１年度	6,900,000	2,070,000	8,970,000
２０１２年度	6,900,000	2,070,000	8,970,000
年度			
総　計	27,600,000	8,280,000	35,880,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：日本文学史・日本文化史

１．研究開始当初の背景

本研究は、国文学研究資料館がコレージュ・ド・フランス日本学高等研究所と連携して実施する、日本文学史の基本構造に関する国際共同研究として計画された。コレージュ・ド・フランス日本学高等研究所と国文学研究資料館とは、2003 年から４年間にわたって科学研究費補助金によって実施した基盤研究（A）「在欧日本古典籍に関する日仏伊共同学術調査―19 世紀以降の和書移動とヨーロッパ東洋学との連関を含めて―」（研究代表者：谷川恵一）において、フランスにおける日本書籍コレクションの集中的な調査を行い、パリのＩＮＡＬＣＯ附属の東洋語

図書館所蔵の日本書籍の網羅的な目録を刊行し、幕末から開始された日仏文化交流の流れを、幕末のパリ万博へ出品された名所図会から志賀直哉旧蔵書に至る、厖大な書物の蓄積の中に明らかにした。こうした成果を踏まえ、日本とフランスの研究者を広汎に結集し、日本文学史の実体と本質を問おうとする、国際的な共同研究を計画するに至ったのである。

２．研究の目的

本研究は、「集と断片」という具体的なテーマを設定し、広く文化史の総体とも通底させた視覚から日本文学史の再構造化を目指すものである。「集」とは、『万葉集』『古今和歌集』『今昔物語集』などを始めとした日本文学の多くの著作がタイトルに採用した名であり、西欧の文学にはない、日本文学史を貫流する最も基本的でユニークな文学作品の構成原理である。国文学研究資料館が編成した日本古典籍総合目録により「―集」というタイトルを持つ著作を検索すると約21,000件を得ることができ、この「集」という構成原理の、時代とジャンルを越えたひろがりを一望することができる。

「集と断片」とは、日本文学史・日本文化史を通貫する極めて重要な視座である。集合体とその断片(部分)のありよう、その関係性、そこに働く力学とのその背景、作品の再生・再構成の方法などの研究を組織的に進展させることにより、「集」という言説編成の基本構造を解明し、従来の文学史を一新させる視座を提出することを本研究は目指す。一首の歌や短かい物語などの一つ一つの「断片」が、どのようなコンテクストのもとで「集」としてのまとまりを与えられ、新たな意味を獲得するのか。一枚の絵が、一首の和歌が、それらが作られた時代を隔てて挿絵つきの物語の中に取り込まれるとき、まったく別のものに姿を変え、時として、それは正反対の意味を指向することさえあり得よう。説話集、和歌集、漢詩集、連歌集、小説集などの、個々の具体的なテクスト編成の分析を積み重ねながら、それらが「集」という形式を獲得するプロセスを日仏の研究者の共同討議を通して分析し、日本の文学と文化の独自の構成作用である「集」の働きをその歴史の中で明らかにしようとするのが本研究である。

３．研究の方法

本研究は、日本文学の言説編成原理としての「集と断片」を総合テーマとし、日仏双方において個別のテーマごとのシンポジウムとワークショップを順次開催し、それぞれ成果をまとめてゆく方法で進める。その際、連携研究者及び研究協力者を個別の小テーマごとの班に編成することはせず、それぞれの専門分野と問題意識に応じ、全員で各小テーマと取り組むこととした。シンポジウムは、連携研究者・研究協力者を中心とする日仏双方の研究会における具体的な準備を踏まえ、本研究に常時参加する者以外の研究者にも広く参加を呼びかける形で開催し、広い視野からの集中的な共同討議を行うことによって斬新な成果を目指した。

日本文学史を貫流する言説編成原理に取り組む本研究は、多様な時代とジャンルを専攻する研究者を結集して実施された。

［日本国内］

本研究を推進するに当たって、国内の研究体制は、担当する役割と研究領域に応じて以下のように構成する。

谷川恵一(国文学研究資料館)　全体の統括及び言説編成史の研究

田渕句美子（早稲田大学）　古典韻文テクストの分析と研究

齋藤真麻理（国文学研究資料館）　仏教的原理と文学テクスト編成の関連についての研究

千本英史（奈良女子大学）　説話文学の編纂意識の研究

佐々木孝浩（慶應義塾大学）　書物の様式と古典文学の編纂意識の研究

木戸雄一（大妻女子大学）　書物の様式と近代文学の編纂意識の研究

堀川貴司（慶應義塾大学）　日本漢文学における編纂意識の研究

十川信介（学習院大学名誉教授）　近代韻文テクストの分析と研究

宗像和重（早稲田大学）　近代散文テクストの分析と研究

和田博文（東洋大学）　都市表象の編成と文学テクストとの関連についての研究

［フランス］

本研究の計画については、フランス側と、約３年前から協議・検討を重ねてきた。その結果、海外共同研究者として、以下のような研究者が参加した。

以下、機関ごとに、研究者名・職名と、その担当する研究分野を記す。

（１）College de France, Institut des Hautes Etudes Japonaises(コレージュ・ド・フランス日本学高等研究所)

MATSUZAKI-PETITMENGIN Sekiko（松崎＝プチマンジャン・碩子)、所長: 図書学

（２）EPHE（Ecole Pratique des Hautes Etudes）(国立高等研究院)

ROBERT Jean-Noel（ジャン＝ノエル・ロベール）、教授(Directeur d’etudes)：仏教哲学（天台)、釈教歌

（３）Paris 7 GREJA（Universite Paris 7, Groupe de Recherche sur le Japon en Science Sociales et Humaines ）（パリ第７大学人文社会科学日本研究グループ)

BRISSET Claire（クレール・ブリッッセ）、助教授：古典文学（テキストと図像、書史、美術史、軍記物）
HORIUCHI Annick（アニック・堀内）、教授：科学史、学問史（江戸 明治）
MINK-SAKAI Cecile（セシル・マンク＝坂井）、教授：近代文学、大衆文学、本の文化史
STRUVE Daniel（ダニエル・ストリューブ）、助教授：江戸文学
（４）INALCO CEJ（Institut National des Langues et des Civilisations Orientales, Centre des Etudes Japonaises ）（フランス国立東洋言語文化大学、日本学研究センター）
BAYARD-SAKAI Anne（アンヌ・バヤール＝坂井）、教授：近代・現代文学、文学理論
TERADA Sumie（寺田澄江）、助教授、古代 中世詩学（和歌、連歌、平安物語）
VIEILLARD-BARON Michel（ミシェル・ヴィエイヤール＝バロン）、助教授、和歌・歌論（平安 南北朝）
（５）CNRS（Centre National des Recherches Scientifiques）（フランス国立科学研究センター）
KYBURTZ Joseph A.（ジュゼフ A・キブルツ）、助教授(charge de recherches)：民俗学、宗教人類学、思想史

４．研究成果

本研究による各年度ごとの成果の概要は以下の通り。

【2009】

短い作品や断片（Fragment）を集成し、一つの著作や集（Collection）にまとめる手法は、日本文学の有力な編成原理である。こうした「断片」と「集」の相互連関を日本文学・文化史の中で明らかにすべく、フランス側の研究者を交えた研究会を 2009 年 8 月及び 2010 年 2 月に国文学研究資料館において開催し、それらを踏まえ 2010 年 3 月にパリにて講演会・ワークショップを開催した。これらを通じ、本年度は、平安から鎌倉時代にかけての宮廷社会における闘詩（詩合）と歌合せの展開、及び、20 世期初頭のパリ在住の日本人留学生たちによる句会の実践とその後のフランスの俳諧受容について、前者においては当該時代の闘詩・歌合わせ作品を、後者においては留学生が編輯した『パンテオン雑誌』を取り上げながら、フランス人研究者との活溌な議論を通して、和歌や俳句といった短詩型文学が日本文化の中でどのように営まれてきたか、問題点を整理した。複数の人間が集まり、決められた題に基づいて作品を作りあうことは、一方では題詠という桎梏に個々の作品を拘束するように作用すると同時に、それ以外に言説を統合する強力な論理を所有しないことにより、他方では、個々の作品の本質的な断片化を結果させることにもなるという点が、これからの研究を進めていく出発点として確認された。

【2010】

一定の方向性を有する時空間の中に個々の体験や見聞を排列してゆくという構造をもつ日記と紀行というジャンルは、一見すると継起したことがらを素朴に並べているかのごとき作品としてわれわれの前にあるが、そこには、記載内容をたんなる物理的な時空ではない高次のレベルで統合しようとする意志が作用している。2010 年 9 月に早稲田大学において開催したシンポジウム「集と断片−日記と紀行の時空−」では、日仏それぞれ二名ずつの研究者が蜻蛉日記、野上弥生子日記、司馬江漢の旅行記、発心集をとりあげ、それぞれのテクストにおける叙述の構造化の問題について報告し、ディスカッサントのコメントを交えつつ参加した研究者との活溌な討議を行い、問題を共有するとともに、多くの有益な示唆を得た。また 2011 年 3 月にパリのディドロ大学で行ったワークショップでは、日本側の研究者が後鳥羽院撰「時代不同歌合」と徳冨蘆花「不如帰」の二次創作とを取り上げ、秀歌のアンソロジーが後鳥羽院による和歌史の構想に裏打ちされたものであること、ベストセラー小説が前後の文学作品の結節点として文学的モチーフの断片を生成する機能を発揮したことについて、それぞれ具体的な作品に即して詳しく報告し、大学院生を交えたフランス側の参加者との質疑応答を通して、本研究の問題領域に関する知見を深め、共有することができた。いずれの試みも、日本側の現在の研究の動向をフランスの研究者に伝えると同時に、日本文学を外から研究するフランス側のアプローチを日本における研究に反映するという、国際共同研究にふさわしい成果を挙げた。

【2011】

2011 年 9 月にパリのコレージュ・ド・フランスにおいて開催した国際シンポジウム「集と断片−日本に於ける「類聚」という営み−」では、個々の断片的作品を一つの統一したテクストにまとめあげていく営みに焦点を当て、「集のかたち：アンソロジーと全集」「世界における百科思想」「収集と分類」の三部に分け、日仏合わせて 10 名がそれぞれのテーマによる報告を行った。取り上げた作品は、中世禅僧による漢詩アンソロジー、和漢朗詠集、元・明時代における日用類書、和漢三才図会などであり、また、東西の百科思想の比較、日本における全集という制度などのテーマについても取り上げた。会場において行われた活溌かつ有意義な討議を通し、個々の作品の構成に即しつつ〈集〉という営みについての問題を深め、共有することができた。また、2012 年 3 月にパリのディドロ大学及びコ

レージュ・ド・フランスにおいて開催したワークショップにおいては、日本側の研究メンバーにより、「職人歌合」「断片の思想−志賀直哉と中野重治をめぐって−」「『十二類歌合』を読む−室町の学芸と機知−」というテーマに基づき、それぞれ断片の集成またはあえて断片を標榜する具体的なテキストを取り上げ、時間をかけてそれらの読解を試みた。

【2012】

日本の言説における断片的ディスクールは、より高次の全体の一部であるというその本来の意味論的機能を、異なった時代やジャンルに応じて多彩に発揮し、豊かに展開してきた。2012 年 9 月に慶應義塾大学において開催したシンポジウム「断片のディスクール―書翰・草稿・詠草―」においては、日仏双方の研究者が、さまざまな時代の書翰、和歌の詠草、「断片」と自から名乗る言説などを取り上げて、それらが同時代の言説秩序との交渉の中でどのような意味を獲得していくのかを中心に論じ、参加者を交えた共同討議を行った。いまだ取り上げるに至らなかったテクストがあるものの、日本文学において果した断片の意義を通時的に捉え返し、中世から近代にいたる断片の文学史を初めて構想しえたことの意味は大きく、本共同研究の締めくくりにふさわしい成果を挙げたといえる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計１件）

谷川恵一、『集と断片−日本文学における言説編成−』（仮題、2014 年 3 月に勉誠出版より刊行予定。本研究で実施したシンポジウムをもとにした論文集。）約 400 頁

６．研究組織

(1)研究代表者

谷川恵一（TANIKAWA KEIICHI）

国文学研究資料館・研究部・教授

研究者番号：10171836

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

田渕　句美子（TABUCHI KUMIKO）

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：80222123

安永　尚志（YASUNAGA HISASHI）

国文学研究資料館・名誉教授

研究者番号：20017411

齋藤　真麻理（SAITOU MAORI）

国文学研究資料館・研究部・准教授

研究者番号：50280532

加藤　昌嘉（KATOU MASAYOSHI）

法政大学・文学部・教授

研究者番号：70335321

木戸　雄一（KIDO YUICHI）

大妻女子大学・文学部・准教授

研究者番号：30390587

千本　英史（CHIMOTO HIDESHI）

奈良女子大学・文学部・教授

研究者番号：50188489

堀川　貴司（HORIKAWA TAKASHI）

慶應義塾大学・附属研究所斯道文庫・教授

研究者番号：20229230

和田　博文（WADA HIROFUMI）

東洋大学・文学部・教授

研究者番号：10175151

十川　信介（TOGAWA SHINSUKE）

学習院大学・文学部・名誉教授

研究者番号：70046465

宗像　和重（MUNAKATA KAZUSHIGE）

早稲田大学・政治経済学術院・教授

研究者番号：90157727

佐々木　孝浩（SASAKI TAKAHIRO）

慶應義塾大学・附属研究所斯道文庫・教授

研究者番号：20225874